

令和5年度 公立鳥取環境大学
一般選抜後期日程 試験問題

小 論 文
(環境学部 90分)

(注意事項)

1. 試験開始の指示があるまで問題を開けてはいけません。
2. 問題冊子は4ページ、解答用紙は3枚です。
3. 解答用紙の所定欄に氏名、受験番号を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、問1～問4に答えなさい。

われわれは日々、数知れない(ア) ^{ルーマー}虚言を弄して生きている。言葉は予言者から信徒へ、隣人から隣人へ、国から国へと、あるいは囁かれ、あるいは説教となって世を巡り、輪廻転生によって生者と死者を、死者といまだ生まれざる者とを結びつける。社会とは人から聞いた言葉をそのままに信じ込むわれわれの生来の性質のうえに成立しているもので、たとえば神とはこれこれこういうふうなものだとか、「幸福」とはかくかくしかじかの方角にあるのだとか、この世に生を授かったのは一連の義務を果たすためだとかいうことを、われわれは疑いもなく信じている。信者たるわれわれは、法という名の食卓で心ゆくまで食したり、ひもじい思いをしたりするのである。ときには「自由」を信じさえするが、自由もまた、それをうのみにするだけならまたひとつの虚言にすぎない。アメリカを目指した入植者たち、^{ビルグリム}彼らはかび臭い専制政治と因習的偏見に縛られたヨーロッパを離れて自由の岸にたどりつこうとしたのだ。そして「深々とした森に覆われた」大陸に到着し、そこで独立の試みに着手した。しかし、その結果は？ 予想通り、あるいは予想するまでもなかったというべきか、さらなる(本国の)地方行政区の誕生にすぎなかった。具体的にいえば、独立国家、資産、経済、産業、豪華、そして新聞と呼ばれる虚言の化け物への隷属がひそかに進行していたのである。

ヘンリー・デーヴィッド・ソローが「近隣のどの家からも一マイル離れた森のなか」に住居を定めた頃には、アメリカの自由を体現しようという意欲的な試みの時期はすでに過ぎ、大衆は皆、まどろみのなかでいた。ソロー自身も述べているように、彼がウォールデンで暮らすようになったのが、1845年の<独立記念日>だったのは、「たまたまそうだった」からにすぎず、独立を宣言する行為において、彼個人と国家とあいだには偶然以上に符合するものは存在しなかった。スタンリー・キャベルが「ウォールデン」についての論評で述べているとおりである。

アメリカ革命は起こらなかった。たしかに入植者たちは反英闘争に勝利したが、あれは独立戦争ではなかった。なぜなら、われわれは自由になっていないから。われわれは本国からの分離すら獲得していない。文学、政治、経済、いずれの点においてもわれわれはイギリス流の生活を脱却していないのである。

(『ウォールデン注解』7)

自国が掲げる国家的< ^{デステイニー}宿命 >のうちに、アメリカ人であることの意義を見出せないことを知っていたからこそ、おそらくソローは徹底的にアメリカ人であり続けたのであろう。ここでいうアメリカ人とは、正確には異端的存在という意味である。アメリカでは、制度的秩序の及ぶ範囲のすぐ向こう側に自由がある。近隣のどの家からも一マイルはなれたウォールデンの森のなか、木々がコンコードの街の虚言をさえぎるところで、人は独りみずからのなかにアメリカを発見するのである。アメリカ大陸にあってさえ、アメリカを発見しようとする者は原点たる別離のジェスチャーを再演し、ウォールデン池のほとりへたどりつかな

ければならない。

ソローは、すでに定められた事実がいっそう厳然たる形で現われる極限状態に身を置こうとした中世の修道士とは異なり、この世に生きることを意味を問うために森に入った。人生とはその意味を試してみることであり、自由とは<機会の地>でみずからその試みを行う冒険のなかにこそ存在する。一般の実験と同様に、ウォールデンへの一時的移住というソローの試みもまた、厳然たる事実を確立するためのものであった。

わたしはじっくり生きようと思って森へ行った。人生の本質的な事実だけに向きあい、それが教えようとしていることを学べないかと考えたのだ。いよいよ死ぬときになって、それまで生きていなかったことに気づくような愚は避けたかったのである。わたしは人生と呼べないものを生きたくはなかった。生きることは何ものにもまして大切であり、やむを得ない場合以外、諦めの人生は送りたくなかった。人生を深く味わい、その随を心ゆくまで吸いつくし、スパルタ人のようにたくましく生き、人生でないものすべてを追いちらし、なぎ倒し、ぎりぎりまで刈り込み、人生をつきつめてその根源に迫り、もしそれがつまらないものだとなったら、そのつまらなさをすべてあるがままに受け止めて世間に知らせれば良い。あるいは、それが荘厳なものであれば身をもって味わい、次の移住先でその真価を人々に説けばよいと考えたのだ。というのも、わたしには多くの人々が人生について、それがいったい神のものやら悪魔のものやら、妙に確信が持てないままに、「神を崇め、永遠に神を受け入れる」ことが、この世における人間の主要な目的なのだ、いくぶんあわてて結論づけているように見えるからである。

(『ウォールデン』Ⅱ：16)

(イ) 森には、ソローがそこに求めた意味はないのだが、例によって自我の隠れ場所をさらけ出し、人生の事実が何であれ、彼の心をそれに向きあわせた。ソローは、人生の事実と向きあうことで自分と自然との根源的な関係を見出だそうとしたが、彼が見出したのは、その関係があいかわらず不明確なままだということである。われわれは自然の内部に存在しないからこそ自然と関わっているのだ。われわれは本質的に自然界の秩序には属さないであり(もし属しているのなら、人生の事実を見出す必要などないだろう)、ただこの世に一時逗留する者としての宿命を、自然との関わりの中に見出すのである。ソローが「次の移住先(来世)」といっていることからわかるように、ウォールデンでの実験は、人生の本質がそうであるように、有限な時間性に支配される一時的移住、われわれが日常世界から離脱しつつも生気を取り戻す世界、いや、むしろ離脱によって生気を取り戻す世界への移住である。「じっくり生きよう」として森に入ったことのない者や、画一的で無個性な歴史の奔流に押し流されるだけの者には、けっして人生の真相を極めることはできない(『ウォールデン』は、確かに人生に底があることを示している)。他人との関わりという蜘蛛の巣にひっかかった彼らは、人生について「妙に確信が持てない」運命にある。というのも、みずからの人生を真実の光に照らして問うた経験がなければ、まるで異国のことを聞くように、漠然としてしかも矛盾する、人生についての虚言を耳にするばかりだからである。

ソローはウォールデンへの移住で、人生をそのぎりぎりの本質に、換言すれば死という避けがたい事実まできりつめようとした。人生の事実とはいかに生きるかよりも、むしろいかに死ぬかというところにある。それは、命あるうちに、あるべき人生を生きようとしたかしなかったかによって、「いよいよ死ぬとき」にわれわれのなかに存在したりしなかったりする自覚のことである。科学的事実とは異なり、それは他人に伝えることも再び繰り返すこともできない。虚言の環からするりと逃れるのだ。それは他人から買うことも相続することも出来ない。なぜなら、生きることの経済において、人生の事実とは死に臨んでの支払い能力の程度を指すからである。自分にかわって死への能力を得るために生きてくれる者はいないし、自分のなかのもっとも深い部分に潜むこの能力を発見せずして、人生がその事実の様相を示すこともない。この意味で、人生の事実とは個人の死と同等のものだといえる。「もし事実と正面から向きあえば、あたかもアラビアの偃月刀のように、太陽がその両面できらりと光り、その心地好い刃が心臓と骨髄とを断ちわるのを感じ、人は幸福に人生を完結できるであろう。生であれ死であれ、われわれは事実のみを求めるのだ」(同、Ⅱ：18)。

(中略)

ソローは哲人なのか、意地っ張りなのか、<徹底個人主義者>なのか、それともただの神経症患者なのか？ 確かなのは、彼が聖職者でも新聞記者でもなかったことだけである。『ウォールデン』は人生についてのさまざまな虚言に附言するだけでなく、この世という一時逗留地での何が真実で何が真実でないかを、著者みずからが確かめた経緯について事細かに述べている。(ウ) どういう人生が本物で、どういう人生が本物ではないかという判断が可能になる極限の境地に立とうすれば、『ウォールデン』が文学作品として読者に勧めて(強制でなく) いるように、各人の馴れ親しんだものから離脱することが必要なのである。

出典：ロバート・P・ハリスン著、金利光訳 「森の記憶 ヨーロッパ文明の影」(工作舎)
の抜粋を一部改変

問1：下線部（ア）について、筆者のいう「虚言」とは何か。本文全体を踏まえ、60字以内で述べなさい。

問2：下線部（イ）について、筆者が「森には、ソローがそこに求めた意味はない」と述べるのはなぜか。本文全体を踏まえ、150字以内で述べなさい。

問3：下線部（ウ）について、筆者のいう「どういう人生が本物で、どういう人生が本物ではないかという判断が可能になる極限の境地」とはどのような境地のことか。本文中の語を用いて30字以内で述べなさい。

問4：筆者の主張する「自然」と「人間」の関係性を踏まえ、自然と人間との関わりについて、あなたの意見を600字以上900字以内で述べなさい。